総合研究大学院大学

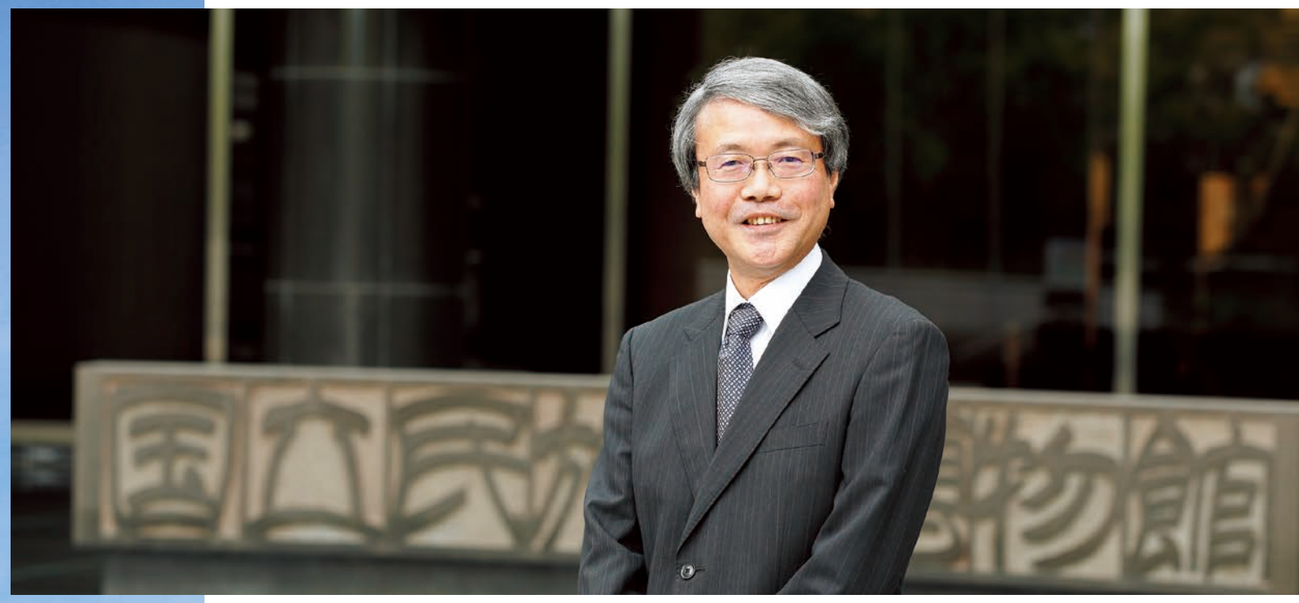
先端学術院先端学術専攻
人類文化研究コース

概要'24

OVERVIEW 2024

国立大学法人
総合研究大学院大学
THE GRADUATE UNIVERSITY FOR ADVANCED STUDIES

国立民族学博物館
National Museum of Ethnology



館長挨拶

総合研究大学院大学（総研大）は、これまでの6研究科20専攻が、昨年2023年から、先端学術院という1研究科、先端学術専攻という1専攻のもとに20コースが設置されるという大変革を遂げ、私たち国立民族学博物館（みんぱく）には、従来の地域文化学専攻、比較文化学専攻に代わり、人類文化研究コースが置かれることになりました。

国立民族学博物館（みんぱく）は、文化人類学・民族学とその関連分野の大学共同利用機関として1974年に創設され、1977年に開館しました。本年で、創設50周年を迎えます。

みんぱくには現在、54名の研究者が在籍していますが、それぞれが世界各地でフィールドワークに従事し、人類文化の多様性と共通性、そして地球規模でのつながりの中での社会の動態について調査研究を続けています。文化人類学関係の教育研究機関として、世界全域をカヴァーする研究者の陣容と研究組織をもち、さらには博物館機能も備えているという点で、みんぱくは世界で唯一の存在といえます。

みんぱくがこれまでに収集してきた標本資料、モノの資料は、34万6千点を超えます。これは、20世紀後半以降に築かれた民族誌コレクションとしては世界最大のものです。また、博物館施設の規模の上で、みんぱくは、現在、世界最大の民族学博物館となっています。

人類の文明は、今、数百年来の大きな転換点を迎えているように思われます。これまでの、中心とされてきた側が周縁と規定されてきた側を一方的に支配しコントロールするという力関係が変質し、従来、それぞれ中心、周縁とされてきた人間集団の間に、創造的なものも破壊的なものも含めて、双方向的な接触と交錯・交流が至るところで起こるようになってきています。その動きのなかで、世界には新たな分断が生じてきています。

一方で、2020年以来のコロナ禍を経験した私たちは、私たち人類の生活が、目に見えないウイルスや細菌の動きと密接に結びついていること、言い換えれば、われわれ人類もあらゆる生命を包含する「生命圏」の一員であることを、身をもって経験することになりました。また、人新世（Anthropocene）などという時代の呼び方が唱えられ、人間の活動が地球環境そのものに不可逆的な負荷を与えていることが自覚されて、未来を見据えた地球規模での対応に迫られています。

このように、人類全体での協働が必要とされるにも関わらず、それを妨げる力学が働いているというのが今日の状況です。それだけに、人びとが、異なる文化を尊重しつつ、言語や文化の違いを超えてともに生きる世界を築くことが、これまでになく求められています。今ほど、他者への共感に基づき、自己と他者の文化についての理解を深めるという、人類学の知、そして民族学博物館の役割が求められている時代はないと思われます。

みんぱくに設置された総研大の人類文化研究コースに所属する大学院生は、文化人類学をはじめ考古学、言語学、宗教学、生態学、生物学、芸術学、音楽学そして、保存科学、博物館学、情報工学など、広範な研究領域を専門とする個性ゆたかな教授陣の指導を受けられるのみならず、上で述べた世界に冠たる資料の蓄積に身近に接することができます。みなさんが、これらの学術資源を縦横に使いこなし、新たな研究の領野を切り開いて、それぞれの分野のパイオニアとしてはばたいて行かれることを期待しています。

国立民族学博物館長　**吉田 憲司**

コース長挨拶

人類文化研究コース（Anthropological Studies Program）は、文化人類学・民族学とその関連分野の視点に立ち、先史時代から現代まで人類が世界各地で形成してきた多様な文化を学び研究するところです。研究としての方法論上の特徴は、調査対象とする国や地域、場所がどこで、テーマが何であろうと、比較的長期の民族誌的な現地調査（エスノグラフィックなフィールドワーク）を行い、オリジナルな参与観察に基づく実地データを記述・分析することです。学生はそうして得られたデータを先行研究に照らし合わせて検討し、他の分野の研究やレポートに見出される知見と対峙しながら考察した博士論文を作成します。ただし、本コースは先に関連分野と付言したように、言語学、考古学、文化研究の視点から対象にアプローチする学生も受け入れてきております。人類文化は非常に多様であり、それに取り組むために生まれた人類学的な研究手法にも多様性が孕まれているためです。

人類文化研究コースの最大の強みは、本コースが国立民族学博物館に設置されていることに求められます。地域や専門を異にして、様々なトピックを研究する45名の教員が教育に携わっているため、学生の多様な志望に木目細かく対応できるからです。また、大学と異なり本コースでは、講義やゼミにとどまらない研究上の研鑽に役立つ経験の機会を提供しております。たとえば、大学共同利用機関ならではの国内外の研究者と協働して行う共同研究プロジェクトや国際シンポ・研究集会から、博物館としての収蔵品などのモノの研究に焦点を当てたフォーラム型人類文化アーカイブズプロジェクトなど、複数の研究が日々進められています。いずれも国内外の研究者が最先端の学問的成果を生み出すためにあつまっているため、そうした成果に直にふれ、海外の研究者を含めた研究者ネットワークの構築にも役立つことでしょう。

また博物館ならではの標本資料、映像音響資料をもとにした各種の展示、講演・公演会、映画会などを研究に活用してもらえます。これらは他の大学等の機関には、あまり類を見ない教育・研究の環境上の利点だと思います。それらを活かして、人類文化研究コースへの進学を希望する皆さんには世界各地の文化的な事象について幅広い関心をもつジェネラリストでありながら、かつ博士論文のかたちに昇華されるような特定の地域やテーマのスペシャリストになることを目指してほしいです。

人類文化研究コース長　**丹羽 典生**

人類文化研究コース（博士後期課程）

独創的な文化人類学・民族学を目指して

本コースは国立民族学博物館が基盤機関となり、先史時代から現代まで人類が世界各地で形成してきた多様な文化に関する教育研究をおこないます。文化人類学・民族学とその関連分野の視点に立ち、特定の文化を記述分析する民族誌学的研究や、特定の観点から文化を比較する通文化的研究を指導します。学生は、フィールド調査で得たデータ、国立民族学博物館が所蔵する標本、映像・音響、文献資料等を活用しながら研究し、博士論文の完成をめざします。

充実した教授陣

教員数が学生数をうわまわるという、他大学にはない恵まれた教育環境において、学生一人一人の資質やニーズに合わせた、きめの細かい指導が可能です。コース担当教員は各分野の第一線で活躍する研究者であり、最新の研究動向に基づいた指導をうけることができます。

豊富な情報源

みんぱく図書室には、文化人類学・民族学関連のさまざまな研究テーマに関連した資料が所蔵されており、国内における文化人類学・民族学の大学や研究機関の中でも有数の規模の資料類を利用してもらえます。また、国立民族学博物館が主催する数多くの共同研究会・シンポジウムへの参加を通して、国内外の優秀な研究者との交流ができます。

各種の支援制度

リサーチ・アシスタント制度、論文校閲費用助成制度、学会発表やフィールドワークの旅費等支援制度など、充実した研究支援が受けられます。

指導体制

個別指導と共同指導を組み合わせた指導体制を採用しています。学生には主・副2名の指導教員がつき、入学から学位取得まで個別指導の形で研究指導をおこないます。一方、共同指導体制を取るゼミは3名の教員が担当し、研究の内容だけでなく発表方法などに関する指導をおこないます。担当教員と主・副指導教員以外の教員にもゼミへの参加を求めることができます。

人類文化研究コース（2024年度）

❶専門分野　❷現在の研究課題　❸研究のキーワード

相島 葉月 准教授

❶社会人類学・イスラーム学・中東研究

❷現代エジプトにおける美と身体文化に関する社会人類学的研究
日本と中東に関する文化的知識のグローバルな流通について
❸モダニティ、都市中流層、マスメディア、教育、現代イスラーム思想、消費、様式美、独創性、知的伝統

飯田 卓 教授

❶生態人類学・文化遺産の人類学・視覚メディアの人類学

❷マダガスカルにおける漁民文化と漁撈技術
アフリカにおける文化遺産とコミュニティの相互影響
日本人類学の発達における大衆メディアの役割
❸インド洋、アフリカ大陸、日本、人類学史、文化遺産実践、大衆アカデミズム、情報と知

伊藤 敦規 准教授

❶ アメリカ先住民研究・博物館人類学・知的財産問題の人類学的研究

❷人類学博物館の Indigenization に関する研究
❸米国先住民、博物館人類学

上羽 陽子 准教授

❶民族芸術学・染織研究・手工芸研究

❷現代インドの手工芸文化に関する民族芸術学的研究
❸民族芸術学、手工芸文化、染織研究、インド、伝統的技術

卯田 宗平 教授

❶環境民俗学・東アジア研究

❷日本的な動物利用の実態解明に関わる民俗学研究
人類と鳥類とのかかわりに関する地域間比較研究
東アジアの内水面漁撈に関わる人類学的研究
❸自然と人間、動物利用、家畜化と野生性、物質文化、技術と技能、日本列島、中国

宇田川 妙子 教授　（2025年 3 月退任予定）

❶南ヨーロッパ研究・性研究

❷イタリアおよび地中海ヨーロッパの民族誌的研究
ジェンダー／セクシュアリティに関する文化人類学的研究
社会理論の批判的再考
❸イタリア、地中海ヨーロッパ、イタリア人、文化人類学、ジェンダー／セクシュアリティ研究、南ヨーロッパ研究、性研究

太田 心平 准教授

❶社会文化人類学・北東アジア研究・博物館組織行動論

❷韓国・朝鮮社会における文化の統合性と多様性の研究
労働現場としての博物館における組織行動と動機付け
❸韓国・朝鮮、近代性、社会的記憶、物語論、世代集団、知識生成、博物館

岡田 恵美 准教授

❶音楽民族学・南アジア研究

❷インド北東部のポリフォニー歌唱文化に関する音楽民族学的研究
年中行事と歌の伝承をめぐる音楽民族学的研究
マイノリティの芸能と生存戦略に関する民族誌的研究
❸インド、マイノリティ、山岳民族、ポリフォニー、歌唱文化、伝承、観光資源化、教育資源化、芸能研究、楽器学

小野 林太郎 教授

❶海洋考古学・東南アジア研究・オセアニア考古学

❷熱帯島嶼域における人類史や資源利用史に関する考古学研究
漁撈や海の利用にかかわる人類・考古学的研究
水中文化遺産を対象とした海洋考古学的研究
❸東南アジア島嶼部、インドネシア、オセアニア、オーストロネシア語族、漁撈、水中文化遺産、人類史

樫永 真佐夫 教授

❶東南アジア文化人類学

❷東南アジアの伝統的政治社会組織に関する歴史的研究
物質文化に焦点を当てた黒タイの民族誌的研究
ベトナムにおける国家と民族の関係に関する研究
❸東南アジア大陸部、ベトナム、黒タイ、白タイ、タイ系言語集団、社会人類学

川瀬 慈 教授

❶映像人類学・民族誌映画

❷エチオピアの音楽職能集団の人類学的研究
民族誌映画制作の理論と実践に関する研究
アフリカの無形文化の保護と継承に資する映像人類学研究
人類学研究にもとづく創作的な話法の探求
❸映像人類学、民族誌映画、エチオピア、音楽職能、Ethio-Jazz、エスノフィクション、エスノポエティクス

韓 敏 教授　（2026年 3 月退任予定）

❶社会人類学・中国研究

❷歴史記憶と象徴に関する人類学的研究
❸社会主義近代化、中国、文化遺産、観光、文化表象、記憶、聖地巡礼、英雄崇拝、漢族、シボ族

菊澤 律子 教授

❶言語学・オーストロネシア諸語・言語研究における地理情報システム（GIS）の利用

❷オーストロネシア諸語における統語構造の変遷
言語データを軸としたオセアニアの先史に関する学際研究
手話言語と音声言語の対照研究
❸オセアニア、フィジー、オーストロネシア、記述言語学、比較（歴史）言語学、比較（歴史）統語論、先史言語学、手話言語学

齋藤 晃 教授　（2028年 3 月退任予定）

❶歴史人類学・ラテンアメリカ研究

❷植民地期アンデスの先住民の総集住化に関する人文情報学的研究
南米ボリビア低地のモヘニョに関する歴史人類学的研究
❸ラテンアメリカ、アンデス、アマゾン、植民地時代、エスノヒストリー、先住民、キリスト教

齋藤 玲子 准教授

❶アイヌ・北方先住民文化研究

❷アイヌおよび隣接する民族における物と人の移動と交流
環北太平洋地域先住民の物質文化に関する比較研究
❸アイヌ、北海道、北アメリカ、物質文化、観光、博物館

笹原 亮二 教授　（2025年 3 月退任予定）

❶民俗学・民俗芸能研究

❷モノの遺存の総体的把握を通じた生活文化に関する民俗学的研究
❸日本、民俗学、三匹獅子舞、民俗芸能

島村 一平 教授

❶文化人類学・モンゴル研究

❷モンゴル・シベリアにおける宗教人類学的研究
ヒップホップ（ラップ・ミュージック）の実践に関する国際比較研究
❸モンゴル、ブリヤート、シャーマニズム、モンゴル仏教、エスニシティ、ナショナリズム、チンギスハーン表象、ヒップホップ

新免 光比呂 教授　（2025年 3 月退任予定）

❶宗教学・東欧研究

❷ファシズム運動における宗教的要因の比較研究
❸ルーマニア、ファシズム、レジオナール、キリスト教

菅瀬 晶子 准教授

❶文化人類学・中東地域研究

❷パレスチナ・イスラエルを中心とした東地中海アラブ地域で、一神教徒が共有する聖者崇敬の研究
イスラエルにおけるアラブ人市民を中心とした、マイノリティによる文化表象のありかた
❸中東、東地中海、パレスチナ、イスラエル、キリスト教徒、マイノリティ、アイデンティティ、エスニシティ、文化表象、共存

末森 薫 准教授

❶文化財科学・保存科学・文化遺産学・中国仏教美術史

❷寺院空間・洞窟空間に描かれた彩色壁画の研究
光学的手法による博物館資料の保存・活用に関する研究
❸保存科学、博物館環境、文化遺産、洞窟空間、壁画、仏教美術、光学撮影、中国、エジプト、国際協力

鈴木 英明 准教授

❶歴史学・インド洋海域史研究・アフリカ研究

❷19世紀を対象としたインド洋西海域世界の実態解明
20世紀前半のペルシア湾における拘束の実態解明
移動概念の学際的再検討
❸インド洋、海域世界、奴隷、奴隷廃止、移動

鈴木 紀 教授　（2025年 3 月退任予定）

❶開発人類学・ラテンアメリカ文化論

❷開発援助プロジェクトの人類学的評価法
博物館における先住民族文化表象
❸ラテンアメリカ、メキシコ、ユカタン、開発援助、フェアトレード、博物館展示学

寺村 裕史 准教授

❶情報考古学・文化情報学

❷情報考古学的手法を用いた文化資料のデジタル化と情報統合に関する研究
❸ GIS（地理情報システム）、考古学、情報科学

中川 理 准教授

❶文化人類学・グローバル化研究

❷資本主義と周縁の接合に関する人類学的研究
難民出身のモン（Hmong）と国家に関する人類学的研究
❸経済人類学、政治人類学、ヨーロッパ、移民、難民

奈良 雅史 准教授

❶文化人類学・中国研究

❷中国における宗教と少数民族をめぐる人類学的研究
宗教と移動をめぐる人類学的研究
❸宗教実践、国家、自律性、公共性、移動、エスニシティ、ムスリム、回族

丹羽 典生 教授

❶社会人類学・オセアニア地域研究

❷オセアニアにおける紛争と少数民族に関する研究
日本におけるオセアニア関連資料の収集に関する研究
応援に関する通文化比較
❸宗教運動、紛争、開発、少数民族、収集、応援

野林 厚志 教授

❶人類学・民族考古学・台湾研究・食文化研究

❷生業技術の通文化比較研究
食の多元的価値に関する人類学的研究
台湾におけるエスニシティの動態の探究
❸生業文化、食文化、物質文化、ハンター・ガーデナー、台湾原住民族、エスニシティ、文化資源

信田 敏宏 教授

❶社会人類学・東南アジア研究

❷マレーシア先住民に関する人類学的研究
インクルーシブ社会に関する人類学的研究
❸東南アジア、マレーシア、オラン・アスリ、日本、博物館、知的障害者

日髙 真吾 教授

❶保存科学・保存修復

❷地域文化の保存と活用に関する研究
博物館資料の保存方法の研究
❸日本、保存科学、保存処理

平井 京之介 教授

❶社会人類学・日本研究・東南アジア研究

❷水俣病被害者支援運動の人類学的研究
「負の遺産」の生成に関する博物館人類学的研究
タイのコミュニティ博物館についての人類学的研究
❸日本、タイ、ラオス、経済人類学、社会運動、博物館、上座部仏教、水俣病

平野 智佳子 准教授

❶文化人類学・オーストラリア先住民研究

❷オーストラリア先住民の問題飲酒に関する人類学的研究
デジタル先住民研究
❸オーストラリア、先住民、飲酒、デジタル、物質文化

廣瀬 浩二郎 教授

❶日本宗教史・民俗学

❷障害者文化に関する人類学的研究
日本近代の新宗教に関する歴史的研究
❸日本、東北、九州、京都、歴史、宗教、福祉、文化

福岡 正太 教授　（2027年 3 月退任予定）

❶民族音楽学・東南アジア研究

❷映像音響メディアとインドネシア音楽の変容
伝統芸能の伝承と映像記録
❸インドネシア（スンダ）、東南アジア、映像音響メディア、民族音楽学

藤本 透子 准教授

❶文化人類学・中央アジア地域研究

❷中央アジアにおけるイスラーム実践の人類学的研究
カザフの伝統医療に関する研究
カザフの移動と社会再編に関する研究
❸中央アジア、カザフスタン、ムスリム、宗教実践、伝統医療、社会再編、移動

ピーター J.マシウス 教授（2025年 3 月退任予定）

❶先史学・民族植物学

❷History of agriculture and plant domestication, with specific interests in taro (Colocasia esculenta), paper mulberry (Broussonetia papyrifera), and other plants used for food, fodder and fibre.
❸Asia, Pacific, Mediterranean, ethnobotany, ethnobiology, plant domestication, food history

松尾 瑞穂 准教授

❶文化人類学・ジェンダー医療人類学・
南アジア研究

❷近代化、開発がもたらすリプロダクション実践の変容に関する研究
サブスタンスと身体研究
子育ての比較文化論
❸リプロダクション（性と生殖）、ジェンダー、インド、サブスタンス、身体

松本 雄一 准教授

❶アンデス考古学

❷アンデス文明形成過程に関する考古学的研究
モニュメントをめぐる考古学的研究
❸アンデス文明、古代文明、複合的社会

丸川 雄三 教授

❶文化財情報発信・連想情報学

❷連想情報学に基づく文化財情報発信に関する研究
❸文化財、連想検索、デジタルアーカイブ

三尾 稔 教授　（2027年 3 月退任予定）

❶文化人類学・南アジア研究

❷南アジアにおける多様な宗教伝統の共生に関する研究
インドのナショナリズムと宗教の関係に関する研究
インドの大衆消費社会化と祭礼の変容に関する研究
❸ラージャスターン州メーワール地方（インド）、グジャラート州（インド）、ヒンドゥー、ムスリム、文化人類学、宗教人類学、南アジア地域研究

三島 禎子 准教授　（2028年 3 月退任予定）

❶文化人類学・西アフリカ研究

❷国際移動に関する文化人類学的研究
❸西アフリカ、セネガル、ソニンケ、商業民族、民族ネットワーク

南 真木人 教授　（2026年 3 月退任予定）

❶南アジア研究・文化人類学

❷ネパール人移民に関する人類学的研究
映像音響資料の再資源化に関する研究
❸在留ネパール人、社会運動、環流する文化、先住民族、当事者コミュニティ、研究資源の共有化、楽師カースト

八木 百合子 准教授

❶文化人類学・ラテンアメリカ地域研究・
アンデス民族学

❷南米アンデス地域の宗教文化に関する研究
❸ペルー、アンデス、キリスト教、カトリック、聖人信仰

山中 由里子 教授

❶比較文学比較文化

❷中東およびヨーロッパにおける驚異譚の比較文学的研究
驚異と怪異の比較研究
アレクサンドロス伝承の東西伝播
❸西アジア、アラブ文学、ペルシア文学、博物学、想像界、イラン、ユーラシア交渉史

吉岡 乾 准教授

❶言語学・南アジア研究

❷北パキスタン諸言語の記述言語学的研究
❸ブルシャスキー語、ドマーキ語、カティ語、カラーシャ語、記述言語学、パキスタン、カラコラム山脈、ヒンドゥークシ山脈

吉田 憲司 教授

❶文化人類学・博物館人類学・アフリカ研究

❷アフリカにおける造形と儀礼の人類学的研究
博物館・美術館における文化の表象のあり方の研究
❸イメージ、アフリカ、ヨーロッパ、日本

学修活動・研究活動

カリキュラム

本コースの学生は、専門分野に蓄積された知見や方法論に関する講義、研究課題に関連する討論を行う演習、学生個々のニーズに即した論文作成指導を通じて、自らの研究課題への理解を深め、高度な研究を推進する力を身につけます。

1年目

● 1年生ゼミナール（授業科目名「基礎演習1・2」）において、以下の3つのシリーズを受講します。

01 研究計画シリーズ

入学直後、学生は個々のこれまでおこなってきた研究および博士課程での研究計画を発表します。

02 テーマ・シリーズ

学生が幅広い知識を習得することを目的として、各教員が交代で専門分野について講義し、それに基づいて議論を進めます。

03 リサーチプロポーザル・シリーズ

1年間の研究や講義等を経たうえで、改めて学生が自らの今後の研究計画を練り上げて発表し、リサーチプロポーザルを作成して提出します。

● 文化人類学・民族学とその関連分野の基礎的な知識と方法論を習得するために、共通科目（授業科目名「人類文化研究基礎1・2」）を選択し履修します。

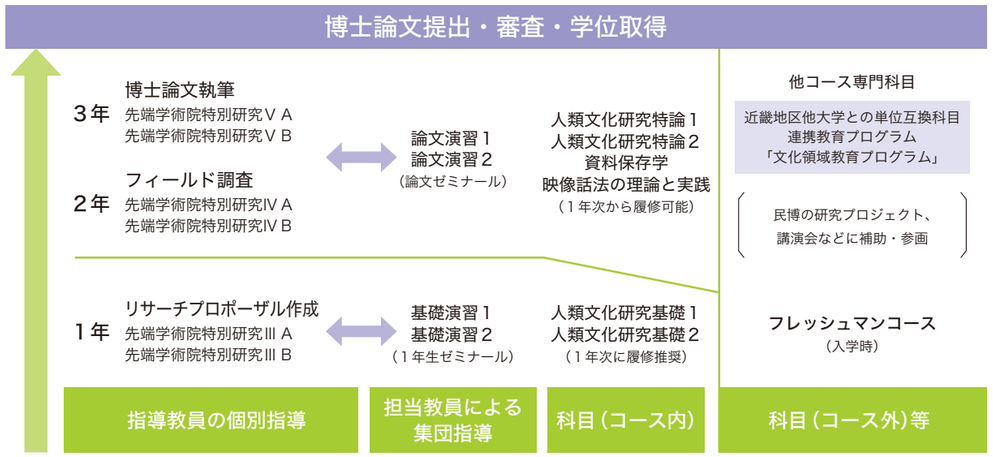
2年目以降

● 各種助成金、コースの学生派遣事業、SOKENDAI研究派遣プログラムなどを活用しフィールド調査を実施します。

● 投稿論文および博士論文の一部に関して論文ゼミナール（授業科目名「論文演習1・2」）で数回発表し、参加者からの批判や助言を受け、討論やコメント、論点の整理などのスキルを磨き、かつ研究を進めるうえで必要な多角的・複合的な視点を身につけます。

● 指導教員による指導（授業科目名「先端学術院特別研究Ⅲ A～VB」）と論文ゼミナールによる議論を得ながら博士論文の章になるいくつかの投稿論文を発表し、最終的に博士論文を作成します。

人類文化研究コースの履修モデル



学位取得

人類文化研究コースの教育課程における修了要件を満たし、文化人類学・民族学とその関連分野の基本的な知識と教養を身につけたうえで、自立した研究者としての力量を兼ね備え、博士論文審査および口述試験に合格した者に学位を授与します。

めざす博士像

本コースでは、文化人類学・民族学とその関連分野の学術領域に蓄積された知見と方法論を修得し、それらを応用して高度な研究を推進することができる博士人材の育成を目的としています。

- フィールド調査や資料分析を通して事象を深く理解し、自由な発想に基づいて、主体的に新たな独創的な知的価値を創造することができる人物
- 国・地域・言語・文化・性別・宗教などの差異とマイノリティ性を尊重し、対話と協議に基づき、高い普遍性をもつ学術成果を国際的に発信することができる人物
- 自らの専門性に立脚しつつ、融合的・学際的な視点から関連分野の課題に関心を寄せ、幅広い学術の進展に資することができる見識豊かな人物
- 自らが行う学術研究の社会的な意義や位置づけを認識し、研究者としての倫理観と責任感をもって自律して行動できる人物

研究支援

リサーチ・アシスタント（RA）制度

教員の指示・監督の下で、研究の補助業務等に携わり、自らの能力の向上を図りながら給与を得ることができます。

学生派遣事業

博士論文作成に不可欠な国内外の調査や学会での成果発表に要する旅費、宿泊費などの支援をおこないます。

SOKENDAI研究派遣プログラム

高い専門性と広い視野、国際通用性をそなえた研究者の育成を目的として、国内外の大学、研究機関、企業等における共同研究活動や調査活動等に必要な経費を支援する制度です。

入学料・授業料免除等制度

経済的理由により入学料や授業料の納入が困難な学生に対する経済的支援として、入学料・授業料の免除（もしくは収納猶予）の制度があります。授業料免除については、毎年2回、授業料免除申請の受付をおこなっています。授業料免除が許可された者は、半期の授業料の全額もしくは半額が免除されます。

特別講義

外部研究資金調達のための申請書の書き方、論文投稿のしかたなどをテーマにした特別講義をおこなっています。

日本学術振興会「特別研究員」採用数

年度	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024
採用数	4	2	1	2	2	2	2	4	0	2	2	1	2	1	2

博士論文リスト

博士論文リスト（2009年度以降）

課程博士

奈良県大和郡山の金魚養殖をめぐる民俗誌 ―養殖池・生産技術・販売と流通―	新海　拓郎（地域）	[2023.9.28 文学]
中国四川の客家の創出に関する文化人類学的研究 ―成都市龍泉驛区洛帯鎮における儀礼と慣習の分析から―	星野　麗子（比較）	[2022.9.28 文学]
近現代の日本の都市における庭の景観と植物利用　―東京都台東区谷中の事例を中心として―	髙野　哲司（地域）	[2022.9.28 学術]
包摂的かつ協働的な博物館活動に関する研究 ―台湾の桃園市立大溪木芸生態博物館の実践を中心に	邱　君　妮（比較）	[2022.3.24 学術]
The Kong Puja Drum : A Musical Communication in the Community of Khon Muang, Nan Province, Thailand	カンティウォン・ティティポン（比較）	[2022.3.24 学術]
韓国近現代画家金煥基の南北分断体験と制作活動 ―朝鮮の文化を象徴するモチーフを中心に	松岡とも子（地域）	[2022.3.24 文学]
移民の食事に関する文化人類学的研究 ―広島県在住の中国人女性の家庭を事例として	謝　春　游（地域）	[2022.3.24 学術]
チベット・アムド地域における村落社会と信仰生活の変容に関する人類学的研究 ―中国青海省海南チベット族自治州貴南県ボンコル村の事例から	拉　加　本（地域）	[2022.3.24 学術]
先史アンデス古期におけるマウンド形成の考古学的研究 ―クルス・ベルデ遺跡における環境変動と集団的実践の変化	荘司　一歩（比較）	[2021.9.28 文学]
台湾の先住民族認定とエスニシティの形成に関する文化人類学的研究 ―シラヤ族の「正名運動」を事例として	呂　怡　屏（地域）	[2021.9.28 文学]
ケニア沿岸部の零細漁業者による水産資源の利用に関する生態人類学的研究 ―かご漁を事例として―	田村　卓也（比較）	[2021.3.24 文学]
Formation of Music of Kazakh Diaspora in Mongolia :A Case Study of the Musical Practices of Professional Performers	八木　風輝（比較）	[2021.3.24 文学]
ベトナムのモンの二元論における諸存在の制作と構成 ―「常世」と「現世」の関係に着目して―	今井　彬暁（地域）	[2020.9.28 文学]
神戸南京町50年の民族誌的研究 ――包摂的チャイナタウンの生成と変容	辺　清　音（比較）	[2020.3.24 文学]
中国都市部の家庭の食生活に関する歴史民族誌 ―社会主義制度下（1949-2018年）の天津市の事例―	劉　征　宇（比較）	[2020.3.24 文学]
オイラド・モンゴルにおける口頭伝承とアイデンティティ ―故郷創出物語から―	査 斯 査 干（地域）	[2020.3.24 文学]
中国新疆オイラドの宗教復興に関する人類学的研究 ―寺とオワー祭祀の復活に関わる転生活仏シャリワン・ゲゲン14世―	那 木 加 甫（地域）	[2019.3.22 学術]
中国青海省におけるチベット仏教復興運動下の民間信仰の変容に関する人類学的研究 ―同仁県ワォッコル村を事例として―	喬 旦 加 布（地域）	[2018.3.23 文学]
近代フィリピンにおける民族衣装をまとった聖母像の研究	古沢ゆりあ（比較）	[2017.9.28 文学]
自然資源の利用に関する環境人類学的研究 ―ニカラグアの先住民による商業的ウミガメ漁の事例―	高木　　仁（地域）	[2017.3.24 文学]
スナックにおける言語コミュニケーション研究 ―対人関係を調節する接客言語ストラテジー―	中田　梓音（比較）	[2016.9.28 文学]
日本社会の自然葬に関する民族誌的研究 ―NPO 法人「葬送の自由をすすめる会」を中心に―	金セッピョル（地域）	[2016.3.24 文学]
都市回族コミュニティの維持と宗教実践 ―中国陝西省西安市における回族の帰属意識をめぐる民族誌的研究	今中　崇文（地域）	[2016.3.24 文学]
韓国の地域社会における華僑のアイデンティティに関する民族誌的研究 ―韓国華僑ビジネスと華僑協会を中心に―	金　　桂淵（地域）	[2015.9.28 文学]
「野球移民」を生みだす人びと ―ドミニカ共和国におけるトランスナショナル移民研究―	窪田　　暁（比較）	[2015.3.24 文学]
モンゴル遊牧民のモノの情報をめぐる交渉に関する民族誌	堀田あゆみ（地域）	[2015.3.24 学術]
My *Huaca*: The Use of Archaeological Heritage in Modern Peru from a Public-Archaeology Perspective	サウセド・セガミ・ダニエル・ダンテ（比較）	[2014.9.29 文学]
中国雲南省における徳宏タイ族の即興うたと感性の民族誌的研究	伊藤　　悟（地域）	[2014.9.29 文学]
ナイジェリアの都市イレ・イフェにおける「アーティスト」の民族誌的研究	緒方しらべ（比較）	[2014.3.20 文学]
現代アンデス農村における聖人信仰の変容 ―人の移動に焦点をあてて―	八木百合子（比較）	[2012.9.28 文学]
変化しつづける装い ―中国雲南省文山モンの自己と他者をめぐる人類学的服飾研究―	宮脇　千絵（地域）	[2012.9.28 文学]
周辺イスラームのダイナミズム ―タイ南部村落におけるイスラーム復興運動と宗教実践の変容―	小河　久志（地域）	[2012.3.23 文学]
カオダイ教ハノイ聖室の民族誌的研究 ―ベトナム北部地域の都市における女性たちの社会関係―	伊藤まり子（地域）	[2012.3.23 文学]
無文字社会における歴史記憶の生成と継承 ―南エチオピア牧畜民ボラナにおける口承史の分析をとおして―	大場　千景（地域）	[2012.3.23 文学]
ヨーグルトをめぐる言説の生成と展開 ―社会主義期からポスト社会主義期にかけてのブルガリアを中心に―	マリア・ヨトヴァ（比較）	[2011.9.30 文学]
現代東南中国における宗親会の民族誌的研究―国家との関係を中心として	陳　夏晗（比較）	[2011.3.24 文学]
現代タイ社会における開発と僧侶 ―僧侶による社会貢献とネットワーク形成に焦点をあてて―	岡部真由美（地域）	[2011.3.24 文学]
オーストラリア先住民ヨルタ・ヨルタの環境管理のための先住民運動に関する文化人類学的研究	友永　雄吾（地域）	[2011.3.24 文学]
農業技術改善の民俗誌 ―紀ノ川下流域村落の一七～二〇世紀前半における動向の分析―	加藤　幸治（比較）	[2010.9.30 文学]

論文博士

タイ東北部における土器づくりと職人をめぐる人類学的研究 ―土器生産地ダーン・クウィアンの形成	中村真里絵	[2024.3.22 文学]
Sedentarization and Lifeway Choices of the Botswana San : Mobility and Subsistence（1929-2010）	池谷　和信	[2023.9.28 文学]
中国・内モンゴルにおける漢民族の牧畜活動に関する研究 ―モンゴル民族との関係の視点から	白　　福英	[2023.9.28 文学]
日本手話、台湾手話、韓国手話における語彙の記述とその歴史的変遷 ―数詞および親族表現に着目して―	相良　啓子	[2020.9.28 学術]
都市環境における関係性を巡る実践としての精霊憑依 ―マリの首都におけるソンガイ移民の精霊憑依に関する人類学的研究	内田　修一	[2020.3.24 学術]
グローバル化する互酬性 ―サモア世界の儀礼財の循環と首長制―	山本　真鳥	[2017.3.24 文学]
ベトナムにおける市場経済化の進展と地域文化の生成 ―東北地方のヌン・アン集団の事例から―	チュ スワン ザオ	[2015.9.28 文学]
アイヌ衣文化の研究	津田　命子	[2014.9.29 文学]
先住民生存捕鯨再考 ―国際捕鯨委員会における議論とベクウェイ島の事例を中心に―	濱口　　尚	[2013.9.27 文学]
多文化都市・新宿の生成と展開 ―ライフサイクルの視座―	川村千鶴子	[2013.3.22 学術]
先史アンデス形成期の社会動態 ―ペルー北部ワンカバンバ川流域社会における社会成員の活動と戦略から ―	山本　　睦	[2012.9.28 文学]
小集落から見た初期国家の形成過程 ―先スペイン期中央アンデスのワリ国家を事例として―	土井　正樹	[2012.3.23 文学]
スリランカにおけるエステート・タミルのアイデンティティと「ジャーティヤ」をめぐる人類学的研究	鈴木　晋介	[2011.3.24 文学]
活用される職祖伝承 ―近・現代日本における木工挽物の担い手と木地屋「根元地」―	木村　裕樹	[2010.9.30 文学]
先住民学習の理論と実践 ―ポストコロニアル人類学の活用―	中山　京子	[2010.9.30 学術]

▼博士論文一覧は、こちらをご覧ください。
https://www.minpaku.ac.jp/education/university_next20/dissertation/dissertation

年度別学位授与者数

		'91-'09年	'10年	'11年	'12年	'13年	'14年	'15年	'16年	'17年	'18年	'19年	'20年	'21年	'22年	'23年	計
地域文化学専攻	課程博士	26	2	3	1	0	2	3	1	1	1	1	1	4	1	1	48
	論文博士	14	0	0	1	0	1	1	1	0	0	0	1	0	0	0	19
比較文化学専攻	課程博士	20	2	1	1	1	2	0	1	1	0	2	2	3	1	0	37
	論文博士	8	3	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	15
人類文化研究コース	課程博士															0	0
	論文博士															3	3
計		68	7	5	4	2	5	4	3	2	1	3	4	8	2	4	122

総合研究大学院大学　地域文化学専攻

劉 丹（リュウ　タン）

私は、中国における農業開発に関する人類学的な研究を行っています。現地調査をする中で、ハス農家の実践はグローバル化や国家の食料安全保障、農業開発という複雑な政治経済的要素の網の目の中にあると気付かされました。現在、換金作物の政治的位置づけの変化が、ハス農家の実践にいかなる影響を与えているのか、また彼らの栽培戦略を明らかしたいと考えています。

学部時代から日本語を勉強していた交換留学生として来日し、日本で学ぶ中で、文化人類学という学問に出会いました。その後、日本で文化人類学の勉強を始めました。修士課程を終えた私は、人類学の勉強や自身の研究をより一層深めたいと思い、博士後期課程への進学を決めました。そこで、修士時代から関わりを持つ人類学の先生に国立民族学博物館（みんぱく）にある総研大・地域文化専攻を勧めていただきました。

私は学部時代から人類学を勉強してきたわけではありません。まだまだ人類学の知識が足りないと常に感じています。みんぱくには人類学や民俗学などの先生が多くおり、図書にも恵まれています。主指導や副指導の先生に加え、その他の先生の方も院生の指導にとても熱心です。また、他大学院の教員と共同で行われる研究会が多いです。私は、館内で開催される共同研究会を複数回聴講し、そこで、日本における文化人類学領域の最先端の研究を見てきました。このような環境にいる私は、多くの先生から知的な刺激を受けており、人類学の勉強をより一層深めることができた気がします。さらに、総研大は研究派遣プログラムや特別研究員制度などといった研究支援も充実しています。充実した研究支援や先生方の指導、事務の方の温かいサポートのおかげで、私はフィールドワークや自身の研究に専念することができました。

ハスの水田で除草作業を行う労働者
（筆者撮影、中国湖南省Ｘ県、2024年）

総合研究大学院大学　比較文化学専攻

岸 美咲

私はインドネシア中部ジャワの影絵人形芝居ワヤン・クリにおける女性のダランの研究をしています。ダランは、人形遣いと説明されることも多いのですが、実際には人形操作に加え、上演における物語の語りや、伴奏音楽の演出など様々な役割を一手に担います。ダランは従来、芸能を生業とする家系出身の男性の仕事とされてきましたが、この数年、女性のダランや家系出身でないダランが活躍の場を広げています。私は、女性のダランの生き方や上演のスタイルについて調査し、現代のダランや上演の変容を明らかにすることを目指しています。

私は、修士課程までは芸術大学の音楽学専攻でしたが、文化人類学やフィールドワークにも関心があり、さらに広い見識を得たいと考え、総研大を受験しました。総研大に入学してよかった点は大きく２つあります。

まずは、主副指導教員をはじめ、多様な専門を持つ国立民族学博物館の先生方に丁寧な指導を受けられる点です。先生方のご指導は、自分の研究のアイディアを発展させ、それらをいかに記述するか、考えを深める重要な機会になっています。

次に、フィールドワーク等の渡航費などの経済的な支援制度があることです。私の研究テーマは先行研究が少なかったのですが、コースの支援制度を使用してフィールドワークができ、研究を大きく前進させることができました。また、それと関連して、フィールドワークの経験を持つ先生方や院生が多いため、自身のフィールドワークの経験をもとに様々な議論をすることができ、日々視野が広がっていくのも総研大の魅力だと考えます。

このように、総研大は多くの先生方や院生、そして手厚い各種支援制度に恵まれていて、充実した研究生活を送ることができます。

女性ダラン (クニ・アスモロワティ Kenik Asmorowati 氏) によるワヤン・クリの上演
（筆者撮影、インドネシア中部ジャワ州スコハルジョ県、2024年）

山形大学学術研究院（人文社会科学部担当）　講師　　荘司 一歩（2021年9月学位取得）

総研大の人類文化研究コースは、文化人類学だけでなく、言語学、生態学、歴史学、考古学などの多様な研究テーマを持つ学生と教員が集まる教育機関です。文化人類学と考古学の複合的なテーマを持っていた私も、その柔軟性と学問領域の広さに惹かれて入学しました。実際に、同期や先輩・後輩たちは非常に多様な学問的背景を持っていたことが印象的で、彼ら / 彼女らと肩を並べてゼミに参加し、勉強会を繰り返していると、今まで自分がいかに狭い視野に立っていたのかがよくわかります。研究にひらめきをもたらす様々なアイデアを得るだけでなく、どんな学問にも共通する根本的な研究姿勢や異なる分野の学生と議論するための方法が身に付きました。今から振り返ると、そうした経験が大きな糧になっていることを日々感じます。社会に出れば、自分の研究内容をわかりやすく、異なる分野の人々に伝えるべき機会の方が圧倒的に多いからです。

学生の調査・研究を支える制度が多くある点も魅力的です。海外渡航を支援する旅費助成制度があることが、フィールドワークを志す学生の大きな助けとなると同時に、今後の研究者人生で欠かせない申請書の書き方や研究費の使い方を実践的に学ぶ機会にもなっています。また、教育機関であると同時に、世界的な研究機関でもある国立民族学博物館では、第一線で活躍する研究者が国内外から集まり、独創的なテーマの研究会が多く開催されます。最前線の空気を体感することは、学生として大きな刺激になるともに、無謀な質問をぶつけてみる勇気の大事さを学び、目指すべき研究者の姿を具体的に把握する機会にもなります。みなさんもこの素晴らしい教育・研究環境をぜひ体感してみてください。自分をさらに成長させるような出会いが待っているはずです。

遺跡での発掘調査の様子。貝塚状のマウンドの中から埋葬人骨が出土した。
（筆者撮影、ペルー、2016年）

華僑大学　華僑華人与区域国別研究院　講師　　謝春游（2022年3月学位取得）

私は2015年4月に中国・四川省から私費留学生として広島大学の修士課程に進学しました。当時、広島大学の周辺にある中華料理店で出された食べ物にカルチャーショックを受け、それをきっかけに食文化研究を始めました。みんぱくには、食文化を研究している先生方も多く、「食文化研究を続けるなら、みんぱくだろう」と思い、総合研究大学院大学（総研大）地域文化学専攻に進学しました。

私は食と移民に特に関心を持ち、食を通じた移民社会の展開およびそれに伴う食生活の変化に注目して研究に取り組みました。博士論文では、広島県に住む中国人女性の家庭の事例を取り上げ、これら中国人女性移民の食事の実態や移住先での食経験などを記述し、社会関係が移民の食事に与える影響を研究しました。

総研大の最大の魅力は、総研大とそれぞれの専攻の所在地である大学共同利用機関と連携しているため、双方の豊富な研究資源を利用できることにあると思います。機関に所属する世界全域をカバーする研究者から学び、また世界中から来た研究者と交流したりする機会が得られます。他にも、研究支援が非常に充実しています。私自身も、学生派遣事業とインターンシップ事業を利用して国際学会発表やフィールド調査を行いました。リサーチ・アシスタントや研究会のアルバイトの機会もあり、学生生活のサポートにもなっています。

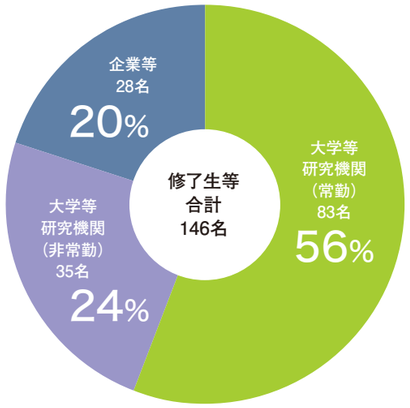
大学院時代を振り返ってみると、いつも見守ってくださった指導教員をはじめ研究に対して議論できた同期や先輩方、後輩たちとの交流、また様々なところでサポートしてくださった研究協力係等の方々のおかげで、無事に学位を取得できたと思います。こういった優れた研究環境が整う研究室で研究生活を楽しむことができるのも、総研大の魅力だと感じています。

オシドリ鍋料理を食べている中国人女性2人と日本生まれの息子
（筆者撮影、広島県、2018年）

※2023年4月より、地域文化学専攻・比較文化学専攻は人類文化研究コースに統合されました。

修了生の進路（2024年6月）

修了生等の就職先



大学等研究機関（常勤）就職先

青山学院大学、愛知淑徳大学、亜細亜大学、愛媛大学、大阪大学、神奈川大学、鹿児島純心女子大学、川崎医療福祉大学、関西外国語大学、関西国際大学、神田外語大学、京都大学、京都文教大学、京都外国語大学、慶應義塾大学、県立広島大学、神戸大学、神戸市外国語大学、神戸女学院大学、公立小松大学、国際ファッション専門職大学、芝浦工業大学、静岡大学、静岡文化芸術大学、女子栄養大学、清泉女学院、就実大学、成蹊大学、大東文化大学、中部大学、中京大学、筑波大学、東亜大学、東京大学、東京外国語大学、東洋大学、帝京大学、長崎純心大学、奈良県立大学、南山大学、日本大学、阪南大学、広島市立大学、宮崎公立大学、武蔵野美術大学、山形大学、龍谷大学、立命館大学、上海師範大学、インドネシア学術総局、ヘルシンキ大学、ソウル大学、青海民族大学蔵学院、吉林大学、華僑大学、河北民族師範学院、雲南省紅河学院、新疆大学、国立台湾歴史博物館、国立民族学博物館、総合地球環境学研究所

総研大ネットワーク

本コースは、平成元（1989）年に地域文化学専攻および比較文化学専攻の2専攻体制で発足し、これまでに180名を超える学生が入学してきました。

総研大ネットワークは、地域文化学専攻・比較文化学専攻、そして人類文化研究コースに入学した人たちのつながりを維持し、情報交換などに役立てる同窓会的な組織です。

入学選考

求める学生像

文化人類学・民族学とその関連分野の研究に対する強い関心を持ち、世界の動向と人類の活動、およびそれらを捕捉しようとする学問の現在を俯瞰的に捉えながら、新しい時代を切り開く研究を目指して豊かな知性と感性を絶えず研磨し、国際的に活躍する意志、語学力、コミュニケーション能力を兼ね備えた学生を求めます。

入学者の選抜について

入学者を選抜するにあたり、本コースの基盤となる国立民族学博物館が担う文化人類学・民族学とその関連分野において、自立的に研究を推進することのできる構想力・基礎学力と論理的な思考力および表現力を重視します。そのような力を適正に判定するために、出願書類、修士論文、これまでに発表した論文がある場合はその論文、および面接により選抜します。

入学者選抜日程

出願資格認定審査申請期間 修士の学位をお持ちでない方で、 修士または専門職学位に相当する学力のある方は、 事前に出願資格認定審査をおこないます	2024年11月5日（火）～11月7日（木）
入学願書受付期間	2024年12月5日（木）～12月11日（水）
第一次選抜（書類選考）・結果通知	2025年1月中旬
第二次選抜（面接審査）	2025年1月27日（月）※予備日1月28日（火）
合格発表	2月初旬～中旬
入学手続き	3月中旬

▼出願書類および出願までの流れについてはこちらをご覧ください
https://www.minpaku.ac.jp/education/university_next20/information/steps

よくある質問

Q >> 国立民族学博物館と総合研究大学院大学とはどういう関係ですか？

A >> 総合研究大学院大学（総研大）は、国立極地研究所や国立天文台など、日本が世界に誇るトップレベルの20の大学共同利用機関等と連係して教育研究をおこなう、学部をもたない国立の大学院大学です。1989年、国立民族学博物館（みんぱく）に、総研大文化科学研究科地域文化学専攻・比較文化学専攻という博士後期課程の2専攻が設置され、2023年、2専攻を統合し人類文化研究コースが新しく設置されました。大学本部は神奈川県葉山町にありますが、実際の教育活動はみんぱくの研究者が、みんぱくの施設や所蔵資料を活用しておこないます。

Q >> 受験する前に希望する指導教員をかならず決めておく必要がありますか？

A >> 必要条件ではありませんが、強くお勧めします。また、受験を申請する前に希望指導教員に連絡を取れば、入学後の研究の見通しを立てる一助となるでしょう。

Q >> 学部や修士課程で文化人類学・民族学を専攻しなかったのですが、人類文化研究コースを受験することはできますか？

A >> 大学などで文化人類学・民族学を学んだ経験がなくても受験することは可能です。しかし、入学後に志望研究が遂行可能であるか見通しをつけるためにも、関連図書などを精読し、少なくとも人類学やフィールド調査に関する基本的な考え方について理解しておいたほうがよいでしょう。この作業は、何をするために当コースを受験するのかを整理するためにも役立つはずです。

Q >> 修士課程ですでに現地調査をはじめているのですが、入学後すぐに長期の現地調査をすることは可能ですか？

A >> 原則として、初年度は、長期フィールド調査をおこなうための準備期間にあてられています。フィールド調査は、単に現地に行けば遂行できるものではありません。また、修士課程でフィールド調査をすでにおこなっている場合でも、博士論文執筆のための調査では、求められる調査の質に大きな差があることが多いようです。入学後の一年間は、教員の指導のもと、調査計画の実現性・妥当性などについて、それまでの自己の研究成果や先行研究との関連に留意しながら検討します。年度末には、フィールド調査に向けたリサーチプロポーザルに関する発表をおこない、計画をより実現性の高いものへと練っていきます。

▼その他のよくある質問はこちらをご覧ください
https://www.minpaku.ac.jp/education/university_next20/infomation/faq

国立大学法人　総合研究大学院大学

世界トップレベルの研究機関で研究者を育成

総合研究大学院大学（総研大）は、大学共同利用機関等との緊密な連係及び協力の下に、世界最高水準の国際的な大学院大学として学術の理論及び応用を教育研究して、文化の創造と発展に貢献することを理念に、1988年に我が国最初の独立大学院大学として創設されました。

総研大の最大の特徴は、大学共同利用機関等の世界トップレベルの研究環境を教育の場としている点にあります。

大学共同利用機関等の研究機関（基盤機関）は、個々の大学では整備できない大規模な施設・設備、大量のデータや貴重な資料等の研究資源を全国の大学の研究者に提供するとともに、国内外の研究者との多彩な共同研究を通じて、我が国の先端学術を牽引する研究拠点の役割を担っています。

総研大は、そのような基盤機関の優れた研究環境において、各研究分野の豊富な研究者集団を教授陣とし、高度な専門教育を提供します。

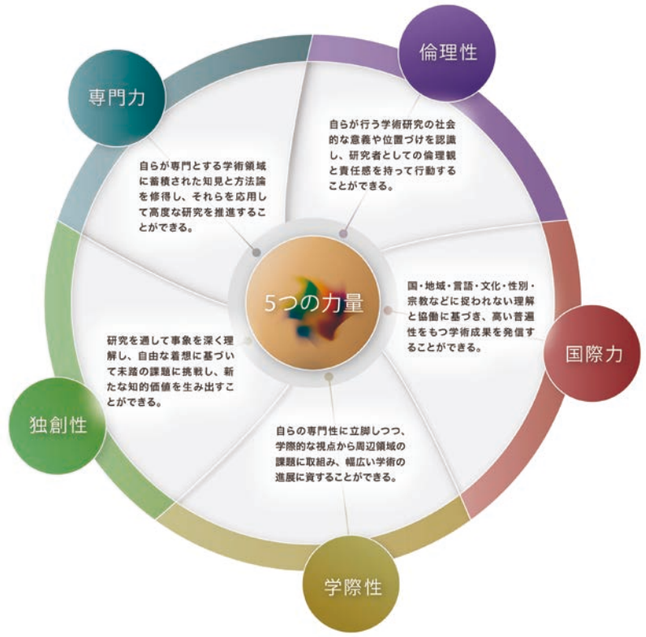
先端学術院について

総研大は、大学院の研究科に相当する教育研究上の基本組織として、先端学術院を置いています。

先端学術院には、世界トップレベルの大学共同利用機関等の優れた研究環境を教育の場とした、多彩な専門分野を持つ20のコースが展開しており、大学共同利用機関等の枠組みや専門領域を跨ぐ柔軟な大学院教育プログラムを通じて、学術及び社会の様々な複合的課題に挑戦できる博士人材を育成します。

自立した研究者の育成

総研大は、「自立した研究者」として必要な、５つの力量を備えた博士人材を育成します。



充実した学生支援

●経済的支援

リサーチ・アシスタント制度や授業料免除制度、SOKENDAI 特別研究員制度等により、学生の研究活動を経済的にサポートします。

●研究派遣支援

SOKENDAI 研究派遣プログラムや国際共同学位プログラムにより、国内外の長期共同研究等に取り組む学生をサポートします。

国立民族学博物館 概要

国立民族学博物館（みんぱく）は、わが国における文化人類学・民族学の研究センターとして、世界の諸民族の社会や文化に関する調査研究をおこなうとともに、異なる文化についての人びとの理解を深めることを目的として、1974年に設立されました。みんぱくは、大学共同利用機関であり、全国の大学・研究機関との連携をもとに調査研究や共同研究を進めるとともに、学術情報を集積しています。その成果を博物館の展示やデータベースの提供などを通じて広く社会に公開することも使命としています。

みんぱくは「博物館機能をそなえた研究所」として、世界的にみても類例のない規模と機能を有しています。博物館そのものをとっても、すでに世界最大級の民族学博物館に数えられるようになっています。みんぱくの展示は、本館展示と特別展示と企画展示とで構成されており、本館展示は、世界をオセアニア、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、それに日本を含むアジア各地に分けた地域展示と、言語や音楽などの通文化展示からなっています。一方、特別展示と企画展示は、特定のテーマのもとに、年に数回、期間を限って開催されます。

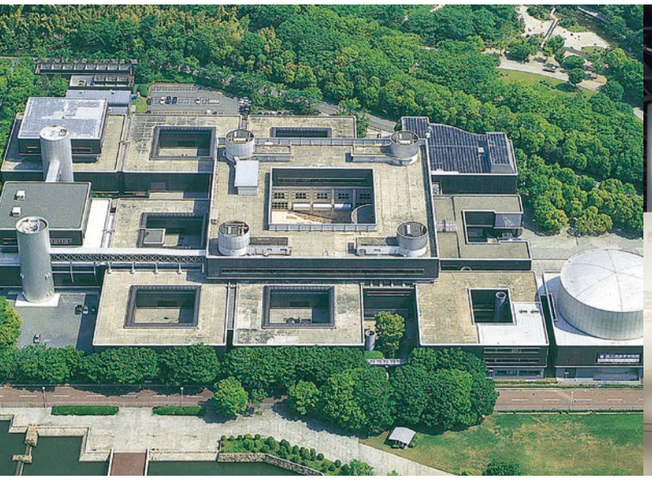
所蔵民族学資料（2024年4月1日現在）

標本資料（未登録資料含む）	
海外資料	180,597点
国内資料	166,073点
計	346,670点

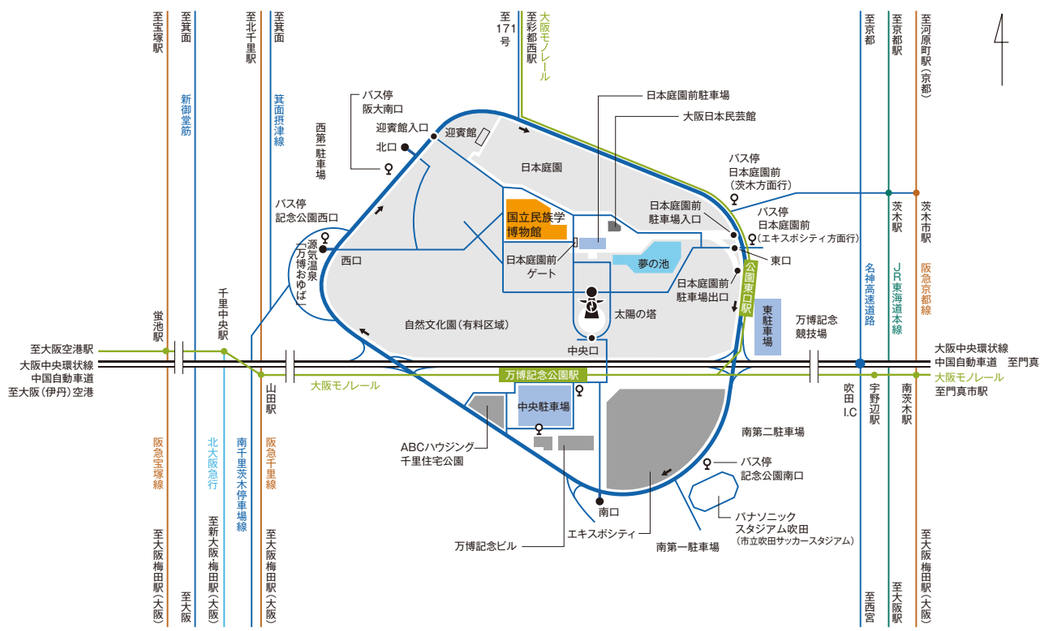
映像音響資料	
映像資料	8,411点
音響資料	64,884点
計	73,295点

文献図書資料	
日本語図書	277,178冊
外国語図書	420,606冊
計	697,784冊

日本語雑誌	10,268点
外国語雑誌	7,122点
計	17,390点



みんぱくアクセス



●大阪モノレール……「万博記念公園駅」、「公園東口駅」下車徒歩約15分
●バス（近鉄バス）……阪急茨木市駅・JR茨木駅から「日本庭園前」下車徒歩約13分
　　阪急茨木市駅から約20分、JR茨木駅から約10分
●乗用車……万博記念公園「日本庭園前駐車場」（有料）から徒歩約5分
※万博記念公園各ゲートで、国立民族学博物館の観覧券をお買い求めください。
　同園内を無料で通行できます。
※万博記念公園をご利用になる場合は、同園入園料が必要です。

［お問い合わせ］

国立民族学博物館 管理部研究協力課研究協力係（大学院担当）

〒565-8511　大阪府吹田市千里万博公園10-1
電 話　06-6878-8236（大学院担当）
FAX　06-6878-8479
E-mail　souken@minpaku.ac.jp
URL　https://www.minpaku.ac.jp/

https://www.minpaku.ac.jp/education/university_next20

国立大学法人
総合研究大学院大学
THE GRADUATE UNIVERSITY FOR ADVANCED STUDIES

国立民族学博物館
National Museum of Ethnology